



## 取り残された気分に

自衛隊の慰問コンサートから部屋に戻った幸さんは、大きなため息をついた。「集まって来るのは私のように時間を持て余した人ばかり。何だか取り残された気分」

6月上旬、震災直後に始まった避難生活は3カ月近くが過ぎていた。郵便局で働きた光一さんと違い、幸さんは新しい職

場を見つけれずにいる。「私がやれることといえば、旅館と（会津若松市内に置かれた）大熊町の臨時庁舎の往復くらい」と、自嘲気味に笑った。

臨時庁舎で支援物資の夏服が支給されたある日の出来事だ。幸さんは中年の男女が1枚のTシャツを引っ張り合っているのを目撃した。「嫌なものを見てしまった」。目を背けながら、はっとした。「被災して

原  
光  
一  
か  
ら  
の  
避  
難

— 7 —

ているのかな」

旅館に戻って体重計に乗ってみたら、いつの間にか3kg近く増えていた。「働かないで、炊事も旅館まかせ。支援物資に頼って暮らしているんだもの、当然よね」。気付けばまた同じ独り言だ。「やっぱり会津若松に来るんじゃないかった」

ふとわれに戻ると、部屋の隅で沙也加さんが読書をしていた。「福島に戻ろう」。そう光一さんが言いたったとき、沙也加さ

んは幸さんと一緒に反対した。今でも時折、「豊田に戻りたい」と口にする。「あの子だってつらいんだ」。幸さんは込み上げていた感情をぐっとのみ込んだ。

**【はなわ】さん一家** 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん（43）と妻幸さん（43）、次女沙也加さん（15）は豊田市で暮らし、会津若松市に移った。長女梨奈さん（18）は東京で大学生生活。